

にせいごせだほうりゅう しゅんこう
二世五姓田芳柳筆「春郊」(一面)

明治42年(1909)頃
史料館史料

I・II期

手入れの行き届いた芝に、遙か向こうまで木々が繁る、うらかな春の風景が描かれています。画面手前の、のびやかな枝に白い花をたくさん咲かせた木は、おそらく何かの果樹でしょう。遠景には、淡紅色に染まる、桜と思しき樹木も見られます。昼時でしょうか、木々は、おだやかな陽光を浴び、やわらかに影を落としています。洋紙に水彩の淡い色調がのり、春ののどかな情景がふさわしく表わされています。

水彩画は、もともと18世紀のイギリスで流行し、明治期に日本に伝えられ大正期にかけて流行します。わが国でも「水絵」という言葉が用いられたように、水彩画は伝統的な岩絵具を用いて紙に彩色する技法と近く、明治期の日本にさほどの抵抗感なく受け入れられたのでしょう。

本図を描いたのは、「GOSEDA」のサインから二世五姓田芳柳(1864~1943)であることが分かります。二世は、しばしば「G」にローマ数字の「II」を組み合わせた独自のサインを使用しました。師である一世五姓田芳柳は、歌川国芳に師事した画家です。また一世芳柳は早くから油彩画を手掛け、神童と言われた息子・義松を横浜で活躍していたイギリス人画家チャールズ・ワグマン(1832~91)に弟子入りさせます。さらに、当時最先端の西洋画教育機関であった工部美術学校に入学させました。義松はその後、長く欧米に滞在します。一方、弟子であり娘婿であった義雄(二世五姓田芳柳)に五姓田芳柳を襲名させ、家系と画系を継がせます。五姓田一門は、ワグマンや工部美術学校から習得した油彩画と水彩画の技法を用い、さらに西洋画らしい主題を描くようになりました。

ところで本作は裏に、「五姓田芳柳寄贈」と「明治42年5月」の文字が記されており、二世芳柳自らこの絵を学習院に寄贈したことが判明します。寄贈の理由はわかりませんが、その翌年、二世芳柳は「日英博覧会」のため渡英、出品作が受賞します。本図は、水彩画という画法に加えて、果樹を春の主題として選んだ点に、イギリスの薫りを感じさせます。ワグマンを介しての憧れの国を意識して絵筆を揮ったのかもしれませんが、そして、画面端にひっそりと見える鳥居らしきモチーフは、一体、何でしょうか。想像の域を超えませんが、五姓田一門が、明治天皇の肖像を始め、明治政府から記録画などの注文を次々に受け、画派として確たる地位についた史実を考えれば、皇室への敬仰の念をひそかに絵に加えたことも納得できるのではないのでしょうか。

(館長 高橋裕子)



(本紙:33.4×49.5cm)



水彩画独特の淡く繊細な色調が見どころです。一体何種類の緑色が使われているのでしょうか。果樹の白い花は、塗り残しで表わされています。

「ボンボニエール」

明治~昭和時代

高橋家史料・山階家資料・筑波家史料

I・II期



とにかくいろいろな意匠が凝らされているところが素晴らしい。この複葉機形ボンボニエールはプロペラが外れ、中に金平糖が入るようになってます。他のボンボニエールもどこが開くのか、想像してみてください。



複葉機形ボンボニエール(6.8×9.2×2.6cm)

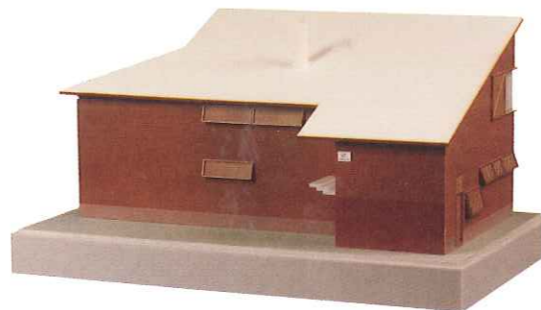
つじくに お さ ほ こ ふ さい かる い ざわ さん そう
「辻邦生・佐保子夫妻軽井沢山荘」(模型)

昭和51年(1976)4月築 いそぎあらた 磯崎新設計
縮尺:1/50模型 紙風景制作
辻邦生資料

I・II期



軽井沢山荘



軽井沢山荘1/50模型
(31.6×20.4×13.6cm)



軽井沢の不思議な家—
辻邦生のエッセイにも度々登場する軽井沢の山荘。傾斜地に沿うように建ち、2本の木が屋根を貫く様子からは、自然を敬愛する辻の思いが伝わってきます。この山荘で過ごす喜びを綴った彼の日記とともにご覧下さい。

辻邦生
昭和50年(1975)~昭和52年日記
(31.5×22.5cm)



辻邦生が「偏奇の巢(ヘンキーノス)」と名付けた軽井沢の山荘は、1976年(昭和51)磯崎新の設計により建てられました。辻が浅草の劇場でよく見かけた永井荷風の自邸 偏奇館から命名されたこの名前には、避暑地特有の喧騒と社交から逃れて、偏屈なまでに仕事や読書に没頭したいという彼の思いが込められています。山荘は傾斜地を利用して建てられ、内部はいくつかの層に分かれて、各部屋を小さな階段がむすぶ構造になっています。辻邦生・辻佐保子という二人の物書きが、同じ空間にしながら邪魔にならずに過ごせるようにと、磯崎は吹き抜けを挟む形で2階の左右両端にそれぞれの書斎を設け、椅子に座っている状態では互いに見えませんが、立ち上ると相手の姿が見える高さで仕切っています。

周囲の樹木をそのまま残しているため2本の木が山荘の屋根を貫いており、夫妻がどれだけ自然を愛したかが、写真からもよく伝わってきます。

辻邦生がこの山荘での生活を楽しむ様子を日記から抜粋してみましょう。

われらが「偏奇ノ巢」山荘の第一日である。静かな夜にシューベルト、メンデルスゾーン、デズモンドなどを聞いて、ぼんやりしている。考えるかぎり最も落ち着いた山荘ができた。Aが何度も手直しを言いつけ、その結果ようやくここまで辿りついた。(中略)霧が出て山の斜面の木立のあいだを流れてゆく。暖炉の前に坐っていると、こんな幸運にめぐりあえるなんて有難いことだと思う。

《四月三十日(金)軽井沢 より》

(学芸員 生田享子)

ボンボニエールとは、皇室・華族家などの慶事の際に配られる、主に銀製の小さな菓子入れです。華やかな意匠工芸が施され、家紋があしらわれることも多くあります。明治中頃から、皇室の大礼、成年式、成婚などの饗宴の引き出物として列席者に贈られるようになり、現在もその慣習は続いています。

ボンボニエールという名称は、フランス語の「ボンボン入れ bonbonnière」に由来するもので、明治大正期の史料中には「菓子器」「ボンボニー」「ボンボン」と記載されている例もあることから、いつからボンボニエールと呼称されるようになったかは定かではありません。広く一般に「ボンボニエール」名が普及するようになったのは、秩父宮勢津子妃著「銀のボンボニエール」(1991)が公刊されてからのようです。日本では中に金平糖が入られます。

ボンボニエールの本体素材は銀製のものが圧倒的に多いのですが、なかには七宝を併用したもの、木製塗装、陶器、竹製などのものもあります。昭和16年(1941)の三笠宮崇仁親王百合子妃の婚儀に際して、貞明皇后から贈られたボンボニエールは竹に塗りを施したもので、また、両殿下の成婚の饗宴引き出物はジェラルミン製でした。この時代には皇室であっても、銀を使用することが不可能だったからです。

様々な形、意匠のボンボニエールをじっくりとご鑑賞ください。

(学芸員 長佐古美奈子)